

交通及び通信

【交通】

○岩国豎ヶ浜往還

江戸時代岩国藩の主要な往還道である岩国豎ヶ浜往還が余田村を通っていた。岩国の川西から祖生村・伊陸村・柳井町・余田村を経て豎ヶ浜村に至る全長約36kmの街道。耕地整理等により消滅した区間もあるが、現在でも堀から西山まで往時の道筋をたどることができる。

○鉄道

明治30年に広島～徳山間に山陽鉄道が開通し、柳井津駅（現柳井駅）が開業した。昭和39年頃に蒸気機関車から電化が進み、ディーゼル車・電車へと変わった。

○県道光柳井線（県道22号）

明治31年、鉄道線路に並行して柳井～田布施間の県道ができた。荷馬車・人力車・大八車による定期宅送便や、大正9年ごろには樋ノ上～田布施間に乗合馬車（客馬車）の定期路線があった。

○市道柳井田布施線（通称南部里道）

市道、柳井―田布施線のほぼ中間点位の所に幅90cm、厚さ30cm、高さ149cmの花崗岩製の「南部里道記念碑」がある。

南面に「南部里道記念碑」、北面に「新庄平生田布施間南部里道開修費金三千円余田村南部各戸配出 明治廿三年経竝成」とあり、開修委員22名の氏名が刻まれている。

道路は、新庄、余田、平生、田布施間（約2.6km）で、ほぼ直線である。平坦な田、畑に土を盛り上げたと思われるが、途中で川や溝があり（6カ所）また峠（2カ所）もあり、機械のない時代、人力による大変な工事だったと想像される。

工事費3,000円は、余田村南部各戸配出となっている。

当時、余田南部は約200戸位あったとして、各戸15円を負担したことになる。

当時の農家は、平均5反～7反位の耕地で25俵～35俵位の収穫だったことから、年間の所得は50円～75円位と考えられる。しかし、農家の多くは小作農のため、収入の30%前後を小作料として地主に納入した。このことからして、年収は平均30円（当時の米価：60kg／2円）前後で、俗に言われる「水呑み百姓」の生活状態であったと推測される。（次頁資料参照）

こうした経済状態から「各戸配出」は、現金は極めて少額で大部分を労力提供でもって改修費金としたのではと思われる。

村人の多くが、生きるのに最低限の生活の中で、また明治維新、文明開化と急激な社会変動の時期に素晴らしい大事業が成し遂げられたことは、ただ驚嘆するばかりである。

この事業を起案した人物の先見性、指導力、そして時代の変化に応じる村人の協調性、特に利便性を直接受けない地区（新庄、平生、蓮台寺）の協力は素晴らしいものがある。

当時の感覚でいえば、高速道路が開通したような画期的な道だったという。

昭和53年3月には農林漁業揮発油税財源身替農道（農免農道）として、幅員5mの拡幅改良工事が実施され、再開通した。さらにその後、平田地区、尾林・西山地区で部分拡幅改良がなされている。

資料

○明治16年の近隣町村の様子

	戸 数	人 口
日積村	847 戸	4,321 人
柳井村	1,063 戸	5,040 人
柳井津村	821 戸	3,779 人
古開作村	300 戸	1,751 人
新庄村	442 戸	2,117 人
余田村	453 戸	2,237 人
伊陸村	816 戸	3,878 人

○明治23年 村長、助役の給料

村長 月給—7円

助役 月給—6円

○昭和初期の日当

15銭

○昭和15年頃の日当

土工 2円20銭

人夫 1円90銭

石工 3円20銭

大工 2円80銭

左官 2円90銭

鳶職 3円

○米価

年	価 格	主なできごと
明治 元年	1 円 6 9 銭	戊辰戦争
5 年	8 0 銭	鉄道開通
1 0 年	1 円 3 4 銭	西南の役
1 5 年	2 円 8 銭	日本銀行創立
2 0 年	1 円 4 6 銭	
2 2 年	2 円	憲法発布
2 3 年	2 円	日本初総選挙 伊藤博文内閣総理大臣
2 5 年	2 円 2 8 銭	
3 0 年	4 円 1 6 銭	
3 5 年	4 円 9 6 銭	
大正 元年	8 円 3 2 銭	オリンピック初参加
8 年	1 0 円 6 0 銭	米騒動
1 2 年	1 0 円 4 0 銭	関東大震災
昭和 4 年	1 0 円 4 0 銭	世界大恐慌
6 年	6 円 5 0 銭	満州事変
1 2 年	1 2 円 9 0 銭	日中戦争
1 6 年	1 6 円 5 0 銭	日米戦争
2 0 年	2 0 円	終戦
2 1 年	2 2 0 円	
2 5 年	2,0 6 0 円	朝鮮動乱
3 5 年	4,1 1 7 円	
4 5 年	8,2 1 8 円	大阪万博
5 5 年	1 7,8 3 9 円	
平成 2 年	1 6,5 0 0 円	東西ドイツ統一

○赤子山林道

中村から西山までの1,900mの林道。昭和51年開通（余田だよりによると昭和56年完成とのこと）。柳井市農林水産課直営事業として順次施行した。

○市道北部柳井田布施線

昭和45年度着工、昭和54年6月開通。総事業費4億4,051万円（三分の二が国庫、三分の一が市費負担）。下馬皿～田布施町境までの延長約3,846m、有効幅員12m、2車線の両側に2.5mの歩道を設けている。名合八幡宮裏付近で昭和54年6月16日当

時の平井龍県知事出席のもと開通式が行われた。

○北部農道（北農免道路）

平成3年10月、市道新庄余田線開通（斎苑入口交差点から新庄安行地区農免農道まで）。平成11年10月1日市道法師田線交差点（新庄安行）から市道坂本線交差点（坂本）までの区間、平成13年11月1日市道坂本線交差点から市道小平尾坂本線交差点（中郷）までの区間、平成16年7月1日市道小平尾坂本線交差点から市道今出線交差点（院内）までの区間が一般供用開始。平成18年2月10日県道周東田布施線につながる全線が開通し、全面供用開始となった。

【通信】

○余田簡易郵便局

昭和24年12月1日余田村役場内に開局。ある時期までは役場職員が郵便局の業務も行っていた。役場の内部に郵便局が開設された経緯ははっきりとは分らないが、村民の利便性の向上と役場の出納業務のため設置されたものと思われる。平成29年9月4日より、小学校及び公民館と同じ建物内に併設されたが、これは全国でも例のないことという。

○有線放送

まだ多くの世帯に電話が普及していないころの通信施設として有線放送があった。各戸に設置した端末から行事のお知らせや連絡事項の放送されるほか、端末同士で通話ができた。余田地区に有線放送が開設されたのは昭和34年のことで、農協が運営し、昭和37年時点で392戸が使用していた。柳井市史によると昭和40年に日積・伊陸・柳井・新庄・余田・伊保庄・阿月の各地区有線放送が合併して柳井有線放送となったが、電信電話公社電話の普及により、翌昭和41年に廃止された。